▲平成20年度八千代こども親善大使と「テップウタイ」との交流会

バンコク・八千代
遠く離れていても

タイ王国の首都バンコク。東南アジアのハブ“スワンナプーム空港”があり、ダウンタウンには、高層ビルが立ち並ぶ大都会。八千代市とは人口も、規模も全く違うのに、なぜ友好都市なのでしょうか。そこには長い間途切れることなく続いてきた交流と、たくさんの人たちが育んできた友情があります。

世界に貢献できる国際人に成長して欲しいという願い

市では、ふるさと創生１億円を活用して平成元年に八千代こども国際平和文化基金を設置しました。この基金には、次世代を担う子どもたちが国際理解を深め、世界に貢献できる人になって欲しいという期待が込められています。

現在３本の柱に添って事業を展開。１本目の柱は、国際平和への理解として、小学５年生と中学２年生を対象に国際平和作文コンクールを実施。㈶日本ユニセフ協会が制作したＶＴＲなどを見て、平和や飢餓、環境問題などについて感じたことを国際平和作文として募集しています。また入選作品を収録した作文集「君たちを忘れない」を発行。八千代こども親善大使がバンコク都訪問の経験などを報告する、親善大使国際平和展も開催しています。２本目の柱は、国際文化交流の推進として、国際平和作文コンクールの入賞者と、八千代子どもサミットのメンバーから八千代こども親善大使を選考して、バンコク都へ派遣しています。バンコクこども親善大使の受け入れも行うことで、小学校での体験授業・文化交流やホームステイを通して、友好を深めています。今までに派遣した八千代こども親善大使の人数は294人、受け入れたバンコクこども親善大使の人数は278人になります。

▲学校交流会でタイの舞踊を披露する子どもたち

また３本目の柱は、国際協力として八千代子どもサミットとの連携を図り、互いに協力・参加して取り組む国際協力の在り方を考えています。

バンコク都を交流先に選んだ理由

タイ王国を選んだ理由は、①アジアであり日本から約4,400㎞、時差も２時間程度であること、②親日的でタイ王室と日本の皇室の結びつきが強いこと、③当時のアドバイザーであった㈶日本ユニセフ協会からタイ王国を推薦するアドバイスがあったこと、などがあげられます。

バンコク都は、タイ王国の首都。人口は約820万人、面積は1,568.7㎢で、本市と比べると人口約41倍、面積約31倍になります。

最初は、タイのどこかの市を紹介してもらうつもりでバンコク都を訪ねましたが、あちらの意向で、まずバンコクの学校で交流がスタート。何年か続けていくうちに、真剣に取り組む本市の姿勢が「規模は問題ではない。素晴らしい交流になっている」と評価され現在まで続いてきました。言葉は通じなくても「相手を理解したい」と心から願うとき、思いは通じます。笑顔が生まれ、自然と心がつながり遠く離れても強い絆となって今日までの交流をつないできました。

こども親善大使がダイラックアンへ

「バンコク都から帰国した後も、こども親善大使としての貴重な経験を生かしたい」、「タイの人たちと交流を続けたい」と、平成16年４月、歴代の八千代こども親善大使が「ダイラックアン」を結成しました。「ダイラックアン」とは、タイ語で旅の安全や幸せを祈って手首に巻く、白い糸のこと。こども親善大使が、バンコク都を訪問した際に手首に巻いてもらったことから、この名前を付けました。バンコクこども親善大使のウェルカムパーティーなどを企画・開催するなど、友情の明かりを灯し続けています。

平成16年12月にインドネシア・スマトラ島沖地震の津波によりタイ南部が被災した際は、市内の小・中学校に災害義援金の呼びかけを行い、寄せられた約200万円をバンコクと㈶日本ユニセフ協会に送りました。この義援金は被災者の仮設住宅の費用に充てられました。

バンコク都でも、歴代のバンコクこども親善大使が「テップウタイ」（タイ語で“東の国よ永遠に”）を結成し、八千代こども親善大使との交流会を実施しています。

▲ダイラックアン主催のウェルカムパーティーで友情を育む子どもたち

交流20年の節目に友好都市提携協定を締結

これらの活動が評価され、平成17年度には、地域づくり総務大臣表彰を受賞しました。

この賞は、地域の個性豊かな発想を活かし、住民をはじめとするさまざまな主体が取り組む魅力あふれる地域づくりを積極的に推進し、顕著な功績のあった市町村などに贈られるものです。本市は国際化部門での受賞となりました。

そして、平成20年には、友好都市提携協定を締結。５月17日の調印式では、当時、副事務次

広告
広告